中部産業遺産研究会

中部産遺研会報

ISSN 2189-5619
Vol.85
2022/01/15

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage

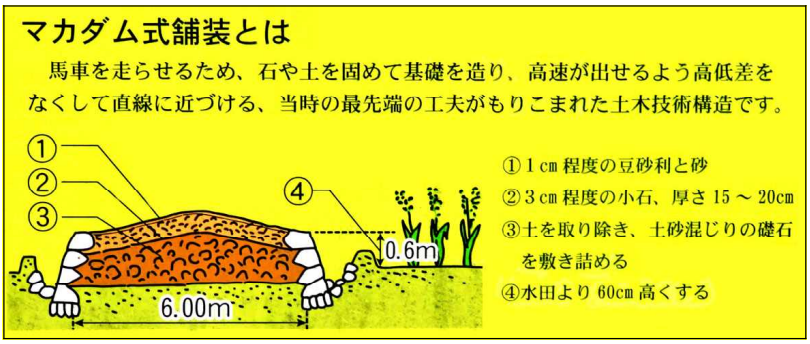
産業遺産紹介　IH-CSIH-062

銀の馬車道

所在地：兵庫県朝来市～姫路市

「銀の馬車道」は、かつて「生野銀山道」や「生野鉱山寮馬車道」などと呼ばれた生野鉱山（兵庫県朝来市）から飾磨（しかま）港（姫路市）までの、距離50㎞、標高差300ｍの産業道路である。明治政府は、フランス人技師コワニエ等を雇い、海外の鉱山採掘技術の導入を目指した。まず、新鋭の大型鉱山機械を生野鉱山まで運ぶ方法を検討し、馬車道の敷設を決定、1873(明治6)年に着工した。工事を担当したのはコワニエの義弟、若いフランソワ・シスレーであった。マカダム方式という、日本で最初の「舗装」という概念をもってつくられた道幅６ｍの直線道路は、1879(明治9)年に完成した。山裾をくねくねと曲がり人と馬だけが通った旧来の道と比べ、当時の人々にとって驚くべき大変革の道路であった。これによって物流コストが60～70％減少し、鉱山の復活に大きく貢献したが、1895(明治28)年、国鉄播但線の開通により、その鉱石運搬の役目を鉄道に譲った。

［写真1］畑川原池を迂回する「銀の馬車道」
(2021/08/30筆者撮影)



出典：銀の馬車道ネットワーク協議会「銀の馬車道」リーフレット

現在、馬車道のほとんどが国道や県道となっているが、農業用池の畑川原池を避ける道がごく一部、馬車道として残っており、発掘され当時の工法が確認されている。2017(平成29)年4月、「銀の馬車道」が日本遺産に認定され地域振興の為、観光道路として大勢の観光客を集めている。

（文・写真：衣川良介）

中部産遺研会報　第85号　目次

１．産業遺産紹介／衣川良介 ---------- 1
２．人造石の産業遺産を歩く(10)／天野武弘 ---------- 2
３．第169回定例研究会の概要／八田健一郎 ---------- 11
４．第170回定例研究会の案内 ---------- 13
５．第171回定例研究会・見学会の案内 ---------- 14
６．研究会スケジュール、2021年度年会費、編集後記、原稿募集 ---------- 14

人造石の産業遺産を歩く(10)：服部長七の人造石工法(長七たたき)　－全国に点在する人造石遺産－

山田才吉と東海市の聚楽園周辺の人造石遺産

Artificial Stones by Hattori Choshichi and Method of Construction:

(10) Artificial Stone Structures as Industrial Heritage in Shurakuen area of Tokai City and Yamada Saikichi

天野武弘／ AMANO, Takehiro

Key Words ; Artificial Stones, Choshichi-Tataki, Hattori Choshichi, Industrial Heritage

1．はじめに－1本の電話から－

今回の人造石遺産の情報は 1 本の電話で突然に訪れた。2019 年 8 月初め、「うちの敷地周りの石垣が人造石でできている、山田才吉がつくった護岸と聞いている、一度見てもらえませんか」、との連絡であった。電話の主は、聚楽園大仏を造ったことで知られる山田才吉（1852 ～ 1937）の子孫家族で、そこは、大仏建立前に同地に料理旅館「聚楽園」を開業したとき、すぐ近くの海岸端を埋め立て、才吉家族が使用することを視野に入れ造成した地であるともいわれた。

写真1　山田才吉（54歳）（守随家蔵）

電話のきっかけは、同年 7 月下旬に碧南市前浜の長大な人造石護岸発見の際に報道された新聞や放映されたテレビを見られてのことであった。しかもその電話の主の名前が偶然筆者と同じであったことも二人の間を繋げたようであった。

ご自宅訪問は、筆者の都合もあって 2 ヵ月後の 10 月初旬になってしまったが、現地調査した現存石垣は総延長 86m ほどの、小規模ながらも紛れもない人造石工法による旧護岸と確認することとなった。

今回はこの人造石護岸を造るに至った山田才吉の人造石への関わりを含め、明治から昭和の時代にかけ稀にみる多彩な事業を展開し、名古屋財界の怪物とも風雲児とも称された、才吉の事蹟を追いつつ述べることにしたい。

2．山田才吉の事蹟－多彩な事業を展開－

人造石遺産とは少し離れるが、今紹介は山田才吉との関わりを抜きにできないため、先ずは文末の参考文献及び才吉子孫家族の聞き取りなどをもとに、才吉の事蹟を年代を追い掻い摘まんで述べる。

・嘉永 5（1852）年 8 月 19 日　美濃国厚見郡富茂登村（現･岐阜市大仏町）で料理屋を営む山田辰次郎・すて夫妻の長男として出生。

・慶応 2（1866）年（14 歳）初秋、江戸に出て板前修業（約 10 年）。

・帰郷後、愛知県の瀬戸及び名古屋でうなぎ屋開業。

・明治 13（1880）年（28 歳）、守口漬考案（名古屋名物「守口漬」を創始）。明治 14 年守口漬を製造販売する「喜多福」を名古屋の末広町（現･中区栄 3 丁目）に創業。明治 27 年第 4 回内国勧業博覧会で有功二等賞受賞。昭和元年に「喜多福」の屋号含めすべてを暖簾分けした元番頭の安藤與吉に譲渡。

・明治 17（1884）年 3 月（32 歳）、愛知県初の缶詰製造工場創業（末広町の「喜多福」）。それ以前の明治 13 年に缶詰製造発案、北海道の「開拓史石狩缶詰所」に従業員派遣、同缶詰所より技術者 1 名の派遣を受け開業準備（米国より缶詰機 2 台輸入）。明治 38 年日本缶詰(株)に改組。明治 39 年に知多郡豊浜と三重県桃取に工場建設。同年ミラノ万博で鰮味付缶詰金牌受賞。明治 42 年東築地の 5 万坪の払い下げを受け 2 万坪の養魚場設置。明治 43 年第 10 回関西府県聯合共進会（会場:鶴舞公園）で一等賞受賞（鰮油漬缶詰）。大正元年 9 月の台風で養魚場被害甚大。大正 2 年 8 月鰮漁不振もあり養魚場を貯木場に変える。大正 5 年名古屋興業株式会社に社名変更、同年名港土地会社と合併。大正 7 年缶詰会社解散。

図1　日本罐詰(株)の5万坪の敷地（名港5号地）、右端建物が缶詰会社の本社工場、手前の堀川沿いに熱田電気軌道（「日本罐詰株式会社之発展」より部分、名古屋港管理組合蔵）

・明治 28（1895）年 10 月（43 歳）、名古屋市会議員当選（～大正 2 年 10 月まで、5 期連続 18 年間）。

・明治 29（1896）年（44 歳）、「中京新報」創刊。新聞「真金城」（金城新報社）を買収し「中京新報」創刊。10 年刊行後、明治 39 年に後に名古屋新聞（現・中日新聞）社長となる小山松寿に売却。

・明治 30（1897）年 3 月 1 日（45 歳）、料亭「東陽館」開業（資本金 8 万円の株式会社、敷地 5000 坪余、建坪 1300 余坪、現・中区栄 5 丁目）。396 畳の大宴会場、小料理店、遊技場などを備えた当時名古屋唯一の憩いの場として人気。明治 36 年 8 月焼失。火災後、株式会社を解散して山田才吉個人の料亭として営業継続。昭和時代に閉館。東陽館の名称は明治 27 年に開通し現在も続く「東陽通」に由来。

図2　「東陽館」絵図（明治32年2月発行、守隨家蔵）

・明治 32（1899）年 9 月（47 歳）、愛知県会議員当選（～大正 12 年 8 月まで、6 期 20 年 8 ヵ月間）。熱田築港（明治 40 年 10 月名古屋港と改称、翌月開港）に関する議論では、新任議員にもかかわらず、築港の反対論者に異議を唱える意見を複数回述べる。明治 40 年度の県会では、山田才吉提出の熱田湾築港航路幅 20 間を 40 間に拡張浚 渫の建議が議決。

・明治 34（1901）年（47 歳）4 月、名古屋商業会議所（現・名古屋商工会議所）会員に選出。同年、名古屋商業会議所運輸副部長、明治 40 年名古屋商業会議所商業副部長、後に商業部長。

・明治 37（1904）年（52 歳）、愛知県五二会幹事長（五二会とは織物、陶磁器、銅器、漆器、製糸の 5 種と、敷物、雑貨の 2 種の業者の組織）、後に会長。

・明治 39（1906）年（54 歳）、名古屋瓦斯株式会社創立（現・熱田区桜田町の東邦ガス本社に 1 万 3000 坪の敷地）。これ以前の明治 19 年に勝間田県令から道路開発を依頼され、延長約 3km の沿線地主を説得し開発に備えたが、その過程で沿線の大地権者となっていたことが瓦斯事業のきっかけとなる。明治 29 年に時任為基知事の勧誘により、資本金 30 万円のガス事業の経営を企てるが恐慌に遭遇して断念。その 10 年後、名古屋財界の重鎮奥田正香申請の瓦斯会社と連携して名古屋瓦斯株式会社設立。明治 41 年奥田正香や豊橋市長大口喜六らとともに豊橋瓦斯株式会社設立。同年浜松瓦斯株式会社設立。

・明治 43（1910）年 4 月（58 歳）、名古屋教育水族館開館（港区東築地の 5 号地に敷地約 1 万坪、現・龍宮町の大同特殊鋼北東側辺り）。水族館の設計指導は東京帝大の飯島 塊 理学博士（水族館に日本初の水槽循環装置の導入者）、その弟子の和田岬水族館の内藤勉技師が現場指導し、約 1200 種を飼育展示、魚群回遊するパノラマ式水槽、ベルギー製厚ガラス、ドイツ製循環式濾過装置、米国製モーターなど最新設備を備えた本格的なもの。教育に資する水族館に位置づけ、その名を冠する日本で最初の水族館となる。大正元年 9 月 22 日来襲の台風により水族館建物被災。同年 11 月復旧開館。大正 9 年名古屋教育水族館を「南陽館」の東に移築再建。昭和 10 年閉館（跡地は現・名古屋市立東築地小学校）。現地名「龍宮町」はこの水族館に由来。

図3　名古屋教育水族館（中央は庭園と水牛池、右奥は回遊槽を持つ龍宮館、左奥は水族館本館）（絵葉書より、守隨家蔵）

・明治 43（1910）年 4 月（58 歳）、路面電車の熱田電気軌道株式会社設立（本社は現・港区東築地町、名古屋教育水族館や遊園地、海水浴客を目当てに敷設）。同年 7 月 15 日熱田神戸橋東（後に内田橋）－東築地（後に南陽館前）間開業（区間距離、約 1 哩 半＝約 2.4km、停留場は神戸橋、紀北橋、発電所前、関東橋、水族館前の 5 駅）。大正元年 9 月熱田伝馬町－東築地（後に南陽館前）に延長（停車駅は 7 駅、全区間距離約 3.4km）。大正 8 年名古屋電気鉄道（現・名古屋鉄道）に吸収合併、昭和 15 年に廃線。

・明治 43（1910）年 5 月（58 歳）、（柳橋）中央市場株式会社設立（発起人の 1 人、名古屋市・現名駅 4 丁目）。名駅近くに 4000 坪の敷地を持った名古屋の「市民の台所」としての役割を担った食品卸売市場。

・明治 43（1910）年（58 歳）、料理旅館「南陽館」一部開館（現･港区東築地町）。大正元年 9 月 22 日来襲の台風により完成直前の 5 階建て（高さ 73 尺＝約 23.4m、客室 42 室）の「南陽館」倒壊（山田式料理運搬用エレベーター及び各部屋に電話設置の最新設備）。大正 2 年 1 月、2 階建て仮館復旧。その後再建。昭和 10 年閉鎖。跡地は現･名古屋市立東築地小学校。現在の「南陽通」は南陽館に由来。

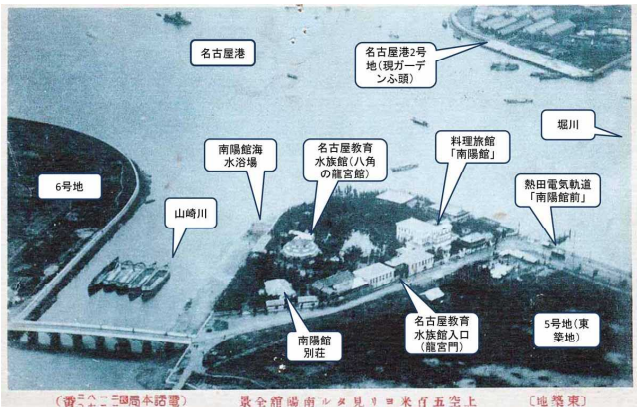


図4　東築地に再建後の南陽館と名古屋教育水族館（絵葉書「上空五百米ヨリ見タル南陽館全景」守隨家蔵に筆者加筆）

・大正 5（1916）年 4 月 16 日（64 歳）、料理旅館「聚楽園（しゅうらくえん）」開業（現･東海市の聚楽園公園内「茶室嚶鳴庵（おうめいあん）」辺り、伊勢外宮前の宇仁（うに）館を移築と推測）。1 万坪の庭園には 1500 株の霧島つつじ、300 余株の梅、桜、楓、桃、松、柏、山吹などを植樹。料理旅館「聚楽園」は平成 3 年に解体となるが庭石や植木は現在の「茶室嚶鳴庵」に転用。ちなみに、「聚楽園」開業に合わせて大正 5 年 2 月に当時の愛知電気鉄道（大正 2 年開通、現･名鉄常滑線）が臨時の聚楽園駅を設置（正式開業は翌大正 6 年 5 月）。その土地は才吉が提供。聚楽園駅はその後、昭和 17 年に愛知製鋼社員の通勤の便を図るため約 400m 南の現在地に移転。

・大正 13（1924）年（72 歳）、料理旅館「北陽館」開館（現･岐阜県可児（かに）市土田）。木曽川峡谷の日本ライン開発を進める一環として 600 坪のライン遊園地を開園し料理旅館「北陽館」を建設。交通の便を図るため昭和 3 年に名鉄直営バス路線の第 1 号となるライン遊園駅（現･可児川駅）－北陽館前（現･湯の華アイランド付近）1.5km が開通。北陽館（後に江陵閣）は終戦後まで営業され、その後下呂市に移築。

・昭和 2（1927）年 5 月 21 日（75 歳）、聚楽園大仏の開眼供養（かいげん）（現･東海市）。大正 4 年 10 月大仏建立を思い立ち、名古屋教育水族館を建設した山田光吉に相談。大正 5 年 2 月 7 日県知事より大仏建立の寄附金募集認可。「大仏建立趣意書」には大正天皇御大典記念として「人造石を以て高さ 72 尺に至る一大仏像を建立」とある（予定地は「南陽館」のある 5 号地）。しかし募金集まらず建立中断。その後、場所を現在地に変更し、大正 13 年 5 月 6 日起工式。同年 1 月に建立趣旨を昭和天皇御成婚記念に改める。3 年の歳月をかけ昭和 2 年完成（コンクリート製、座身長 62 尺＝ 18.79m は開眼当時日本一の大仏）。その後 1983 年に大仏及び境内地が「名勝」として東海市指定文化財、2021 年に聚楽園大仏及び仁王像（昭和 4 年完成）が「建造物」として同指定。

図5　聚楽園大仏、昭和2年の開眼供養（一対の大灯籠のうち右側現存、仁王像は建立前）（絵葉書より、守隨家蔵）

・昭和 12（1937）年 1 月 31 日（85 歳）、才吉永眠。

3．山田才吉と人造石との関わり

（1）熱田築港（後の名古屋港）の推進

山田才吉は熱田築港の熱心な賛成論者であった。県会議員に当選直後の明治 32（1899）年 12 月 14 日の「通常愛知県会会議録第 11 号」（『明治 32 年愛知県会議録』153 ～ 189 頁）によれば、この日は築港反対論者 16 名から熱田築港の中止を求める建議案が提出され、延 40 人を超える議員から反対、賛成の白熱した議論が交わされている。このとき才吉は新人議員ながらも、中止を求める建議案に賛成する議員に対して三度にわたって発言し、「一つも感服することはない」、「一つも取るべき価値がない･･･葬るべし」などと語気を強めて述べたようで、三度目の発言の際には議長から発言を制止され、「議場喧騒す」と議事録に記されている。結果的に築港中止の建議案は不採択となるが、この時は服部長七が施工した人造石工法のことも議論の的になっていた。

熱田築港では第一期工事となる明治 43 年までに、1 号地（現･築地ふ頭）から 5 号地（現･築地東ふ頭）の埋立て地護岸と東西の突堤に、人造石工法が採用されている。これを推進した愛知県技師黒田豊太郎（後の築港課長）は、先の築港中止を求める建議案議論の際に、熱田築港では「服部長七が発明した人造石を用いることになっている、大阪（港）ではセ

メントを使うゆえに坪 80 円内外も掛かるが、この方（熱田築港）は坪 30 円内外で出来る」（『明治 32 年愛知県会議録』175 頁）と、人造石で施工する利点を述べている。こうした熱田築港に関わる議論はその後も県会で続いていくが、築港工事において人造石が果たした役割は、度々行われた議論の中で才吉自身も当然ながら認識していたはずである。というより積極的に人造石工法に関心を持ち採用したことが次の事例からも窺い知れる。

（２）名古屋教育水族館は「たたき」仕様か

その一つと思われるのが明治 43（1910）年に開館した名古屋教育水族館である。ここは同年 3 月から 6 月に開催された第 10 回関西府県聯合共進会に合わせて開館された名古屋最初の水族館でもあった。水族館は今では存在しないため絵葉書に残る写真（図6、開館時か再建後かは不明）から推測するしかないが、魚群が回遊するパノラマ水槽を備えた八角形をした龍宮館内部は、かなり斬新な造りが感じられ、上部の壁には海の絵が描かれている。その床面は割石を配置した人造石のようでもある。

図6　名古屋教育水族館の八角の龍宮館内部、魚が回遊するパノラマ水槽（絵葉書より、守随家蔵）

図7　名古屋教育水族館の龍宮門（絵葉書より、守随家蔵）

また龍宮城のようともいわれた水族館入口の龍宮門（図 7）1 階部分は、たたきで仕上げたと思われる造りをしている。

この水族館建物の施工者は、後に聚楽園大仏を手掛けた名古屋の山田工芸所の山田光吉と弟子の後藤鍬五郎であった。後藤鍬五郎（後に後藤工業所自営）は表向きは看板屋だが、聚楽園大仏のほか、聚楽園の仁王像（昭和 4 年完成、高さ約 5.3m、2021 年 2 月に東海市指定文化財）、西尾市刈宿（かりやど）町の常福寺にある大仏（昭和 3 年開眼、台座含めた高さ約 14m）、名古屋市南区の道徳（どうとく）公園にあるくじら像（昭和 2 年完成、全長 9.7 m、2021 年に国登録有形文化財登録）、知多市の長浦海岸にあった高さ 4，5m はあると思われる大タコ「ターチャン」（昭和 2 年、現在は撤去）など、巨大な各種の像をいずれもコンクリートで造ったコンクリート造形家と呼ぶに相応しい人物でもあった。

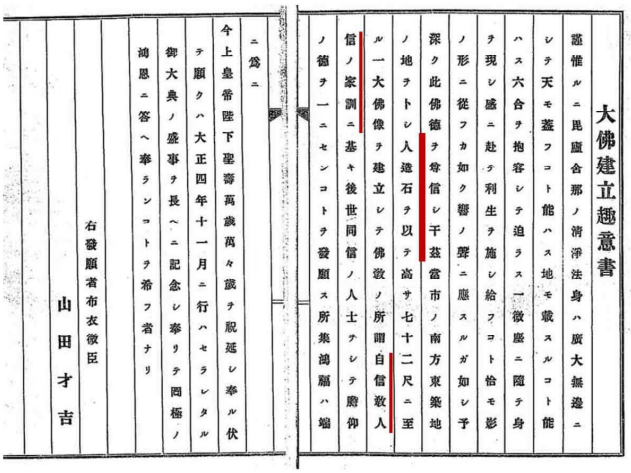
（３）聚楽園大仏の建立と人造石

聚楽園の大仏は先に述べたように、鉄筋コンクリート製である。建立した山田光吉と後藤鍬五郎は、鎌倉の大仏を視察して構想を練ったことが伝わっているが、才吉が大仏建立を思い立った当初は、青銅製でもコンクリート製でもない人造石での建立を思い描いていた。

その背景には、東陽館を火災で失い、名古屋教育水族館や完成直前の南陽館を台風高潮で流された経験から、火にも水にも強く、しかも材料や工費をできるだけ安価にと望んでいたこと。加えて熱田築港で採用された強固な人造石護岸を間近で見ていたことも背景にあったと思われる。

大正 5（1926）年 2 月 7 日に愛知県知事松井茂より認可を受けた「大仏建立趣意書」（図 8）には、「人造石ヲ以テ高サ七十二尺ニ至ル一大仏像ヲ建立」と明確に人造石で建立との文字が書かれている。その目的は、趣意書に「自身教人信ノ家訓ニ基キ後世同信ノ人士ヲシテ膽仰ノ徳ヲ一ニセンコトヲ発願」とあるように、「自身教人信（じしんきょうにんしん）」（仏法を信じせしめんと欲せば、まず自ら信ずることを要す）の家訓がそのもとにあった。合わせて大正 4 年 11 月に行われた大正天皇御大典を記念した建立とも位置づけていた。また建立場所は、才吉が払い下げを受けた名古屋教育水族館や南陽館のある東築地としていた。

しかし才吉は当時、大仏建立費用を全額工面でき


大佛建立趣意書

謹惟ルニ毘盧舎那ノ清浄法身ハ廣大無邊ニ
レテ天モ蓋フコト能ハス地モ載スルコト能
ハス六合ヲ抱容シテ迫ラス一微塵ニ隠テ身
ヲ現シ感ニ赴テ利生ヲ施シ給フコト恰モ影
ノ形ニ從フカ如ク響ノ聲ニ應スルガ如シ予
深ク此佛德ヲ尊信シ干茲當市ノ南方東築地
ノ地ヲトシ人造石ヲ以テ高サ七十二尺ニ至
ル一大佛像ヲ建立シテ佛徴ノ所謂自信教人
信ノ家訓ニ基キ後世同信ノ人士ヲシテ膽仰
ノ德ヲ一ニセンコトヲ發願ス所集鴻願ハ端
ニ爲ニ
今上皇帝陛下聖壽萬歳萬々歳ヲ脱延シ奉ル伏
テ願クハ大正四年十一月ニ行ハセラレタル
御大典ノ盛事ヲ長ヘニ記念シ奉リテ罔極ノ
鴻恩ニ答ヘ奉ランコトヲ希フ者ナリ
右發願者布衣微臣
山田才吉

図8　山田才吉の大仏建立趣意書（守随家蔵に筆者加筆）

るだけの財を持ち合わせていなかった。南陽館ほか度重なる被災を受け、しかも才吉の主要な資金源の一つであった缶詰工場が不振となり、資金不足は否めなかった。「大仏建立寄進芳名録」（才吉子孫宅蔵）に綴じられる「大仏建立趣意書」とともに添付される才吉の願い文書には、「前後 2 回の水火の災難に遭い何分にも資力が足りません」と正直に述べている。しかし一方では多くの浄財の元に建立したいとの思いもあったであろう。こうしたことから少しでも建立費用を押さえるため、まだこの時は費用が安価であった人造石での計画をしたものと思われる。

このことは裏を返せば、請負人の山田光吉と後藤鍬五郎が人造石での建立を承諾していたこと、また人造石による工事自体を心得ていた証ともなろう。すなわち、あくまで推測ではあるが、人造石の大仏建立を決意した大正 5 年の頃は、建立場所となる 5 号地の東築地界隈は人造石による埋め立て工事が終了した段階（明治 43 年 12 月に 5 号地までの名古屋築港第一期工事完了）であり、光吉、鍬五郎両名ともそれまでに何らかの人造石工事に関わり、先の名古屋教育水族館の建物あるいは水族館施設の各所を人造石で施工していたとも考えられる。

しかし大仏建立寄進の願いは実らなかった。寄付金が思うように集まらず計画は頓挫する。ところがそれにめげないのが才吉であった。

寄進を始めた同じ年となる大正 5（1916）年 4 月に料理旅館「聚楽園」を開業させ、大正 9（1920）年には名古屋教育水族館を南陽館の東に再建し、大正 13（1924）年には日本ラインの景勝地に料理旅館「北陽館」を開館するなど、新たな事業を展開する。建立資金の目途が立った大正 12（1923）年暮、改めて先の山田光吉と後藤鍬五郎に大仏建立を依頼することになる。その費用は、今度は寄付に頼らず全額自己資金であった。工法も人造石より強度がありしかも以前に比べて安価となったコンクリートが採用されることとなる。また建立場所も、料理旅館「聚楽園」のある現在地の高台に変更する。

その建立方法が大仏を調査した日本診断設計株式会社によって解明された（「聚楽園大仏等文化財調査業務報告書抜粋版」2020 年 7 月）。ここでは詳細を省くが、大仏の上部まで数十段の型板を作ってコンクリートを流し込む方法が採られている。

また大仏建立作業に従事した左官屋（当時 19 歳～ 22 歳の 3 年間従事）からの聞き取りメモ（1981 年頃に東海市文化財調査委員で名和町の長光寺先代住職の村瀬至高の聞き取り、東海市より提供）によれば、大仏原型の製作は塗装業の山田金一（光吉と

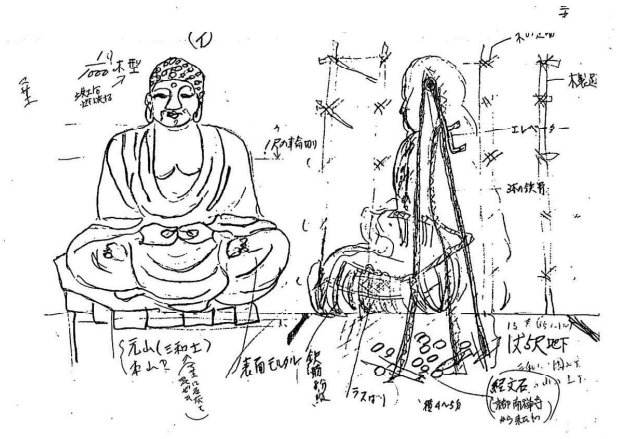


図9　大仏建立作業に従事した左官屋の手書き図（大仏の地盤の「三和土」に注目）（東海市蔵）

同一人物と思われる）と弟子の後藤鍬五郎とあり、セメント使用を明確に記している。とくに注視するのは「螺髪（らほつ）の中は三和土（たたき）、石灰、セメントで固めた」とあるところと、手書き図（図 9）の大仏基礎部分に「元山（三和土）」と書かれるところである。これに従えば、螺髪は石灰を使用したたたきとセメントの混合となり、大仏の基礎地盤はたたき（人造石）で施工されたとも窺える。この地盤については大仏前に立つ仁王像調査の際にたたきと思われる基礎地盤を確認しており（正確には成分分析を要す）、大仏地盤もこれと同じ方法が採られた推測される。

今ひとつ、現在の聚楽園公園には気になる建立物がある。大仏に向かって階段を上った右側（東側）にある立ちの高い大灯籠（写真 2、西側灯籠は撤去）と大仏前の常香炉（じょうこうろ）（写真 3）である。いずれも外観からはたたきの可能性も否定できない。大灯籠には才吉前妻の山田なつ（夏と記される）、常香炉には後妻の山田よねや家族の名がそれぞれ施主として刻まれている。いずれも大仏完成時の昭和 2（1927）年の建立である。

写真2　聚楽園大仏前の大灯籠（2021.11.15筆者撮影）

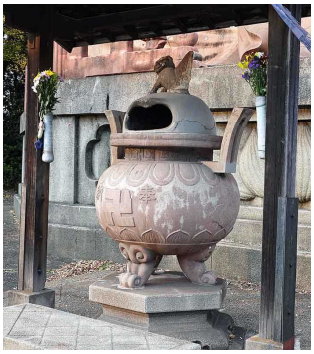


写真3　聚楽園大仏前の常香炉（2021.11.15筆者撮影）

もう一つ気になるのが、この階段付近にある手摺り（欄干）である。一部が欠けた手摺りの破断面からは、たたきと思われ

写真4　聚楽園大仏前の階段付近の手摺り破断面（2010.10.12筆者撮影）

図10　昭和8年建設時の山田才吉の寿像、台座を人造石で築造（絵葉書より、守隨家蔵）

る造りを見せている（写真 4）。

大仏の基礎地盤や螺髪、仁王像の基礎地盤を含め、どのような造りがされているか、今後の修理等で明らかになることを期待している。

ちなみに、聚楽園大仏裏手にあった山田才吉の寿像（図 10、才吉の事蹟を称えて大岩勇夫市長らの音頭で頌徳碑とともに昭和 8 年建立、頌徳碑は大仏脇に移設）の台座が人造石であった（才吉子孫家族の証言）。寿像（銅像）は戦時の金属供出で撤去、台座も解体されたが、才吉が晩年に至るまでいかに人造石に愛着を持っていたかを物語る一コマでもあろう。

4．山田才吉子孫宅の人造石護岸

（1）埋立ての経緯と構想

冒頭でも述べたように、2019 年 10 月初旬に訪問した才吉子孫宅の石垣護岸を人造石と確認したが、それは人造石特有の外観をしていることと、石と石の目地間隔が広く、その目地にたたきの存在を確認したことからであった。そこは規模こそ小さいが、料理旅館「聚楽園」を下った当時の愛知電気鉄道「聚楽園駅」（才吉が埋め立てた土地を提供、駅は後に現在地に移転）のすぐ傍の海岸端であった。

埋め立て年ははっきりしないが、聚楽園を造った頃の大正初期と思われる（守隨家提供の土地台帳には、しばらく後の昭和 3（1928）年 8 月に所有者山田才吉として 217 坪 38 勺を登記とあるが、これ以前から使用と推測）。この当時才吉は、この一帯を料理旅館「聚楽園」を核とした海岸リゾート構想を持っていたようで、後に大仏をここに建立するが、それも早い段階から視野に入れていたのかも知れない。また才吉子孫家族の話によれば、実現こそしなかったが、海水を引き込んだ海水プールも計画していたという。おそらく東築地南陽館前の海岸汚染による海水浴場衰退の教訓もあったのであろう。

こうした一大観光地構想の成否の鍵となるのが交

図11　1945年～1950年頃の山田才吉の埋立て地（周りは入江）と聚楽園付近（国土地理院地図の年度別写真に筆者加筆）

通の便である。ここには大正 2（1913）年に開通したばかりの愛知電気鉄道（現･名鉄常滑線）が料理旅館「聚楽園」のすぐ傍に開通していた。駅を誘致すべく才吉は働きかけ、その土地を提供し、大正 5 年に「聚楽園駅」（図 11 参照）を実現させている。

その駅敷地に隣接し、今回紹介する人造石護岸を持つ埋立て地も同時期に造成したであろう。才吉子孫家族によれば、ここには才吉家族が住む大きな 2 階建ての建物が建っていて、戦後は雑貨店や食堂として利用していた。線路に面した東側に店を構え、1 階奥に床の間付きの 8 畳間が二部屋、2 階にも床の間付きの 8 畳間が二部屋あり、海に面した南側と西側の 2 階の窓は総ガラス張りで見晴らしが良かったという。

こうした造りから一般の住宅ではなく、駅乗降客を目当てにした店舗、小料理屋だったと思われ、そのための造成地だったのであろう。

しかし、風光明媚なこの地も埋立が進み、昭和 18（1943）年の愛知製鋼(株)進出によって様変わりし、駅も移設され、才吉の夢も幻となってしまう。

（2）人造石護岸と擁壁の現地調査から

2021 年 11 月から 12 月にかけて再度現地に訪れて、人造石の旧護岸の簡易実測を家人及び同行した左官職人の協力のもとで行った。その結果、常滑線沿いとなる東側を除いて、埋め立て当時の人造石護

図12　才吉埋立て地の人造石旧護岸の残存状況（国土地理院地図に筆者加筆）

岸及び擁壁を遺していることがわかってきた（図12の赤線部分）。

南側は全面人造石護岸でその全長は 36.8m。西側も旧護岸で全長 16.6m、このうち旧護岸の上部が切り取られて通路となっている部分を除いた現存人造石は長さ 11.2m。北側は陸地と繋げて埋め立てたところで、さらに嵩上げしたことによる擁壁となっていて全長は 38.7m、このうち人造石擁壁は 34.6m である。埋立て地総面積は土地台帳によれば約 719㎡である。

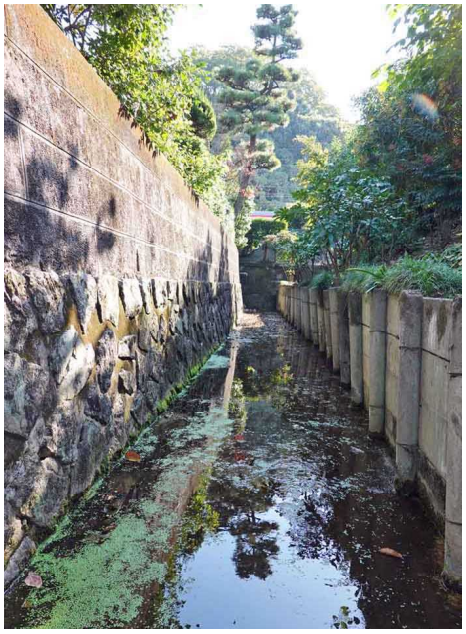


写真5　才吉埋立て地の人造石護岸と人造石の防潮堤（南側）（2021.11.15筆者撮影）

高さ方向については、南側は戦後の埋め立て後に人造石護岸を利用した水路となっているため当初の高さではないが、現状高さは水路底から 1450mm、その上に高さ 1430mm の防潮堤が厚さ約 420mm で全面に施されている。水路底まで計 2880mm の深い谷のようにもなっている（写真 5）。才吉子孫家族によれば、この辺りは遠浅の海で、干潮時にはアサリ採りも行うことができ、満潮時の水位は石垣部分の半分辺りまできていたという。

西側の旧海岸沿いだった護岸部分も埋め立てられ、今は幅の狭い深い水路となっている。ここも割石を使った人造石であるが下部が埋められているため高さ方向は不明だが、防潮堤は高さ 1430mm、厚さ約 420mm と南側と同じ造りである。この防潮堤の一部が切り取られ出入口として利用されている。しかし下部の人造石護岸部分は当時のものがそのまま埋まっているとのことである。

北側の石垣は、元々陸地に接していた部分を 1m 余り嵩上げして埋立て地を造成したときの擁壁で、丸石が使われているもののこちらも人造石である（写真 6）。擁壁高さは平均 1400mm ほどである。しかし防潮堤はない。陸続きでしかも地盤を嵩上げしたことから、防潮堤がなくても浸水の恐れがないとの判断からであろう。

写真6　才吉埋立て地の丸石を使った人造石擁壁（北側）（2019.10.3筆者撮影）

また敷地内側から見ると、防潮堤天端までの高さは約 700mm である。敷地側を防潮堤の高さの中ほどまで嵩上げ盛り土していることがわかる。当初からと思われるが、これが防潮堤の強度を増すことに繋がったであろう。ここは昭和 34（1959）年の伊勢湾台風で水没被災するが（1953 年の 13 号台風では浸水なし）、防潮堤を含む人造石の石垣はほとんど崩れもなく今日に至っているという。敷地嵩上げが好結果を生んだのであろう。なお防潮堤には、これも補強と思われるが、控壁（補助壁）が南北の角に長さ 1m ほど回り込んで造られている。

このように、海に面した護岸には強度を持たせた防潮堤を巡らし、少しでも安全に配慮した造りにしていたことが、調査から明らかとなった。

この防潮堤の造りは、外見はコンクリートのようだが（写真 7）、内部が見られる箇所からは、割石及び煉瓦を骨格としてその間隙にたたきを使っている様子がわかる。煉瓦も使った珍しい構造ではあるが、明らかに人造石工法による造りである。別の箇所でも同じ施工法が垣間見られることから、防潮堤の全てが同様な造りであろうと推察される。

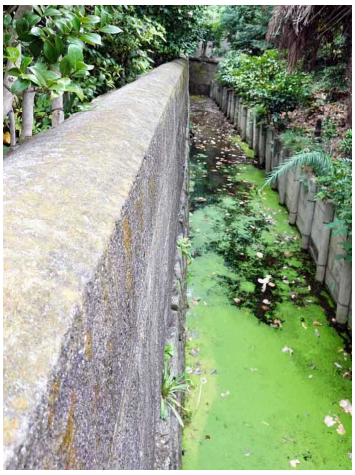


写真7　南側の防潮堤、内部は人造石、表面は人造石小叩き風仕上げ（2019.10.3筆者撮影）

ちなみにこの防潮堤外観は、同行した左官職人に

よれば、大正から昭和にかけて流行った表面仕上げの一方法である「人造石小叩き風仕上げ」とのことである。手間の掛かる仕上げ法であるが、リゾート地に相応しい粋な造りにしたのであろう。

ところで、今ひとつ不思議なことがある。写真 5 と写真 6 を見てもわかるように、護岸石垣の造りが南側と北側で違っていることである。

南側護岸は人造石工法で通常使用する割石（平均で横 424mm× 縦 290mm、目地間隔は平均 81mm）が使われている。しかし北側護岸は全面丸石（平均で横 252mm× 縦 142mm、目地間隔は平均 54mm）である。もちろん人造石工法で丸石を使うこともあるが、小規模な同じ敷地内にこうした違いのあるのも珍しい。家人も物心付いた頃から護岸や防潮堤の造りは変わっていないという。同家所蔵の才吉の娘たちを写した昭和初期の写真にも今と変わらない小叩き風仕上げの防潮堤が写っている。

これも推測の域は出ないが、当時は南側と西側は海に面していたが、北側は陸地だったことから、少しでも工費を安くするために丸石を使ったか、もしくはリゾート地に相応しいデザインを凝らしたものだったのかも知れない。判断は付かぬが、どちらも人造石工法で造られていることに変わりはない。

しかし、今この敷地周辺はすべて埋め立てられ、ここがかつて海岸端であったことは想像すらできない。僅かに遺された人造石護岸にその面影を見るのみである。才吉が海岸リゾート構想の一環として造った唯一遺された人造石遺構でもあろう。

5．浅山新田の樋門と水制

才吉子孫宅の南側は、伊勢湾台風後の埋め立てによって、人造石護岸を利用する形で幅約 1.7m、高さ 3m 近い深い水路となっている。現在は雨水が流れる程度であるが、伊勢湾台風後に海岸が埋め立てられたとき、聚楽園公園にあるヤカン池を水源とする浅山（あさやま）新田の用水路に造り替えられ使われていた。

浅山新田は、寛保元（1741）年に名古屋の浅井七左衛門と大高村の山口弥七郎が干拓した新田で、両者の頭文字から名付けている。その際新田用の溜池として造ったのがヤカン池で、浅井家の屋号茉鑵（やかん）屋から採ったといわれる。新田は伊勢湾岸自動車道の東海インター付近の小判形をした地で（図 13）、当時の地積は 300 反（約 30ha）であった。現在は新田はなく工業団地などとなっている。

この新田の北西側に浅山樋門（ひもん）がある。伊勢湾台風後の高潮対策事業として昭和 36（1961）年にコンクリートで建設されている。時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（https://ktgis.net/kjmapw/index.html）の 1888 ～ 1898（明治 31）年の浅山新田付近の古地図によれば、北東側の現樋門と同じ位置に杁（いり）のような図形が見られるので、ここには明治の頃には樋門があったと思われる。また東海市提供の「都市整備課マップ」昭和 35 年版には、南東側の一角にも樋門のあったことが記されている（図 11 と同様の堤防切り欠き）。南東側の樋門は海面が埋め立てられたことによって今は存在しないが、浅山新田には二ヵ所に樋門があったことがわかる。

図13　ヤカン池を水源とした浅山新田付近の現状
（国土地理院地図に筆者加筆）

また現在の北東側の樋門前には、不思議な二本の並行した石垣造りの構造体が存在する。海辺にあって近づけないため、Google マップでその大きさを見ると、二本とも長さ約 8m、幅約 1.5m で、樋門から海辺に向かってほぼ鉛直に延びている。その間隔は 10m ほどである。水田で使用済みの悪水をスムーズに流す案内堤か、あるいは入江の水流を制御する猿尾（さるお）とも呼ばれる水制（すいせい）なのかも知れない。しかもその造りは人造石のような外観をしている（写真 8）。

写真8　浅山樋門前の2本の石造り水制（人造石の可能性も）
（2021.12.28筆者撮影）

今ひとつ、浅山新田の南に位置する浅山南公園に「浅山樋門」と大きく刻まれた銘板石がある。「明治 43 年 3 月改築」ともあり、その裏面には、ポンプ場設置によって昭和の中期まで当浅山新田にあった排水用樋門の銘板石をここに設置し後世に残す、と記されている。裏面の文字は、東海浅山新田土地整理組合（2007 年解散）が平成 18（2006）年 9 月に銘

板石を移設、設置したときに記したものである。

樋門銘板石が二つの樋門のどちらのものかは定かでないが、北東側の現樋門の所にポンプを備える排水機場があるので、こちら側とも推測される。とすれば、人造石と思われる水制も明治 43（1910）年の樋門設置の際に造られたとの推察もできる。

ちなみに、こうした石製の銘板（扁額）は、明治 30 年代に愛知県で 200 件以上と数多く施工された人造石樋門によく見られている。浅山新田堤防には人造石での施工を窺わせる記述が『愛知県東海市浅山新田堤防発掘調査報告書』（1994 年）に残されている。浅山新田を横切る国道 302 号線工事に伴う報告書であるが、そこには、堤防に関する土地の人の記憶によればとして、「戦後の大きな補修にあたっては、たたき土（石灰と粘土を練ったもの）を間知石（けんちいし）や裏込めや土手に使用した」（同書 23 頁）とある（筆者注：粘土でなく真砂土（まさど）と思われる）。まさに人造石工法を示しており、戦後の堤防補修の際にも人造石による施工があったことを述べている。こうしたことを鑑みると、銘板石が遺る明治 43（1910）年改築の樋門や新田堤防が人造石であったとしても不思議ではない。

やや関連事項や推測が長引いてしまったが、伊勢湾台風後の埋め立てによって、才吉子孫宅の人造石護岸が一時期ではあるにせよ、浅山新田の用水路の一つとして再利用されていたことも、地域を語る歴史として記しておかなければと思う。

6．おわりに－ここも楽しみなエリア－

名古屋財界の怪物ともまたアイデアマンとも称され、稀にみる巨大な建造物建設や事業を展開した山田才吉。しかし度重なる被災に遭遇し、ほかにもまして災害に強い建物をとくに強く望んでいたであろう。その最後の事業ともなったのが聚楽園の大仏建立であった。この初期段階には人造石での建立を計画していたことも見てきたが、その背景には、才吉が壮年時代を生きた明治からとくに大正半ば頃にかけて、服部長七を先駆とする人造石工法が熱田築港や各地の新田干拓堤防や樋門などに広く施工され、工費のかかるコンクリートにも匹敵する強さを持つ工法として一世を風靡していたことも、深く心に刻まれていたであろう。大仏こそこの工法での実現に至らなかったが、大仏と仁王像の基礎部分をはじめ、関連する灯籠や香炉、階段手摺りなどにその可能性が指摘されている。今後が楽しみでもある。

一方、小規模ながらも聚楽園観光を視野に入れた埋立て地に人造石護岸を採用し、100 年を超す今もその用途をしっかりと確保している姿には、驚きとともに感動すら覚える。才吉の手掛けた人造石護岸の遺された唯一の遺産であり、東海市に遺る希少な人造石遺産である。大仏とともに才吉に関わるもう一つの歴史遺産にも位置づけられよう。

また、人造石施工の可能性を述べた浅山新田のほか、名和（なわ）前新田、南柴田新田などの東海市の沿岸一帯は、江戸時代から続いた新田干拓地域でもある。表 1 に見るように、明治 34（1901）年から 36 年にかけ、この地域にはいくつかの人造石護岸工事の記録が存在する。名和村の人造石護岸工事は浅山新田の堤防なのかも知れない。また浅山新田北側の土留木（とどめき）川の入江を挟んで隣接する南柴田新田の防潮堤の一部に人造石が遺っている可能性もある。多くは改修されたと思われるが、まだどこかに隠れているかも知れない。こちらも発見が楽しみなところである。

表1　東海市内の服部長七の人造石施工リスト

工　種	場　所	契約月日	請負額(円)
人造石護岸工事	知多郡荒尾町	M34.7.31	1,970.305
人造石護岸工事	知多郡大田村	M34.8.22	1,480.238
人造石護岸工事	知多郡名和村	M34.7.11	3,691.535
人造石護岸工事	知多郡名和村大字南柴田	M34.7.11	2,234.428
人造石護岸工事	知多郡荒尾町	M35.5.22	678.615
人造石護岸工事	知多郡大田村	M35.5.22	1,943.500
人造石護岸工事	知多郡名和村大字名和	M35.5.23	4,079.228
人造石護岸工事	知多郡名和村大字南柴田	M35.5.23	2,413.673
人造石護岸工事	知多郡大田村	M36.2.25	1,049.441

出典：服部組名古屋支店工事係、明治34-36年「工事一覧表」（岩津天満宮所蔵）

最後になったが、今調査では山田才吉の子孫で東海市在住の守隨家のご協力及び資料提供に負うところが大きい。また東海市教育委員会社会教育課及び日本診断設計株式会社、三好左官工房、高橋敬子氏、山田富久氏ほかに資料提供等でご協力頂いた。感謝申し上げる。

【主な参考文献】

(1)守隨武弘「目で見る山田才吉の足跡」私家版、2016 年 4 月。
(2)藤澤茂弘『不屈の男 名古屋財界の怪物 山田才吉』ブックショップ マイタウン、2013 年 4 月。
(3)『名古屋市史』産業編・政治編・地理編、名古屋市役所、1915 年～ 1916 年。
(4)加納誠『近代史を飾る コンクリート製彫刻・建造物職人 後藤鍬五郎』2004 年。
(5)『東海市史 通史編』東海市、1990 年。
(6)『東海市史 資料編第 5 巻』東海市、1993 年。
(7)『愛知県東海市浅山新田堤防発掘調査報告書』東海市教育委員会、1996 年。
(8)『中部缶詰産業史』中部缶詰製造協会、1993 年。

第169回定例研究会の概要

八田健一郎／ HATTA, Kenichiro

日時：2021年11月28日（日）13:00～17:00
会場：とよた市民活動センター
参加：19名
司会・進行：山田　　記録：八田

1. 研究報告、調査報告

［169-11-01］「とよた市域のガラ紡－発見館の企画展に取り組んで－」／岡部さゆり・舩木麗子（「豊田市近代の産業とくらし発見館」）

企画展の裏話として、三河木綿のルーツやガラ紡機に纏わる事物を紹介いただいた。

西尾市の天竹社では綿が崑崙人から伝ったとされ、崑崙とはクンルン島、現在のセイロン島と推定された。天竹社に伝わる綿は、淡い黄色の花で珍しいもので、発見館でも栽培し綿を採取している。この綿の実を当日配っていただいた。発見館の現展示物は、2024年に新しく設置される豊田市博物館に移される。

質問等

石田：綿が伝わり生産が活発になったのは、江戸時代であり、『日本後紀』にある799年崑崙人が三河到着時点では、貴族の絹や庶民の麻が一般的で綿は広まっていないと考えられる。

杉山：神話的な表現としての「天竺」は，必ずしもインドを特定する表現では無く、インドなどの西方を表すと考えられる。

水野：建築的視点では、江戸時代になり綿が広まり布団が使われるようになって押入が作られるようになった。

［写真1］　発見館企画展　綿から糸への物語
－とよた市域のガラ紡－　（2021/10/22 天野武弘撮影）

［写真2］　発見館企画展　綿から糸への物語
－とよた市域のガラ紡－　（2021/10/22 天野武弘撮影）

［写真3］　発見館企画展にて取材を受ける臥雲弘安氏
（※右から２人目が臥雲氏）　（2021/10/22 天野武弘撮影）

［169-11-02］「産業遺産逸話「ラジオ放送の始まり」」／渡辺治男

東京、大阪、名古屋のラジオ放送初期の経緯について報告された。

質問等

水野：東京でのラジオ放送開始初期に関わった芝浦の東京高等工藝学校は、現在の千葉大学工学部に相当する。

［169-11-03］「久米邦武編『米欧回覧実記』にみるイギリスの産業革命　－シェフィールドの産業遺産に即して－」／石田正治

質問等

浅野：『米欧回覧実記』によると発電所視察（1871年）とあるが、どこか。当時の工場の照明は何か。

石田：発電所は米国と思う。最初の発電所は、米国のエジソン1876年とされている。

当時、大きなガラス窓で照明をとり、電灯は無く、照明はガス灯などであった。

（注：資料の発電所は誤りで、「電気の発明」の記事

第一巻に、「ジーメンス社の電気機器製作場」の記事が第三巻にある。）

黒田：1872年9月29日に訪問の「ウィッカース社」または、「ウィツカール」社と表記されるのは、『ヴィッカース社』とすべきではないか。

石田：当時の回覧実記の表記を尊重。

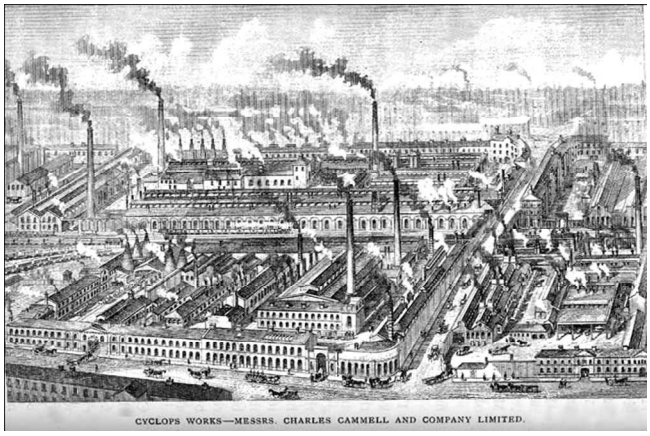
黒田：資料P.7 （Kelham Industry Museum 蔵）は、訂正が必要と思われる。

Sheffield Industrial Museums TrustのKelham Island Museumが所属する。

石田：（後日）「Kelham Island Museum 蔵」が正しいことを博物館の資料で確認した。

寺沢：シェフィールドの近くでは，鉄鉱石の産出されるのか。

石田：その通りで、石灰石やるつぼ用の耐火粘土もシェフィールド近郊で産出した。



岩倉使節団が視察したシェフィールドの「カメロ」氏会社鋼鉄製造場　Merrs Cammell & Co.'s Syclops Works
（Kelham Island Museum 蔵）

2. その他諸報告、保存問題

［169-22-01］トピックス（産業遺産に関する話題・近況など）／事務局

■駅織機（駅ションヘル）一宮市

野村：柔らかい生地が織り上げられるため、「ションヘル（当地通称）」織機が見直されつつある。

以前に当織機を扱った年配女性が、上手に操作されていた。実機は、日本製織機である。

石田：正式には、シェーンヘア Schönherr と言われるドイツからの輸入織機の名前である。

■愛岐トンネル群秋の公開

11 月 27 日（土）～12 月 5 日（日） 9:30～15:00
（入場は 14:00 までに）
活動レポートNo.3 発行（1部500円）

公開中、場内の愛岐トンネル群ブースで発売。

山田：活動レポートは、愛岐トンネル群ブースのみで入手可能。

■浅野：次回報告予定の資料

「日清矢作水力と岡崎電灯・岡崎中部電力の抗争
日清レイヨン美合工場・トヨタ挙母工場への電力供給をめぐって」を先行配布。

■杉山：アツタ号の研究に纏わり、トヨモータースに関する調査を進めており、土地登記簿など公文書に当たって所在地を確定できた。

3. 研究誌、会報（研究会ニュースレター）

［169-31-01］研究誌『産業遺産研究第28号』の編集について／石田正治

従来の募集要項に従って原稿を募集中。詳細を会報などにて通知予定。

［169-31-02］中部産業遺産研究会報について／ 石田正治

［169-31-03］会報ニュースレター　電子メール版について／橋本英樹

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

［169-41-01］シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第39回 予定／八田健一郎

テーマ「生かそう身近な産業遺産」→「活かそう身近な産業遺産」

実行委員会予定→　11月28日（日）午前に実行委員会を実施。次回シンポジウム第39回は、2022年6月19日（日）または、6月26日（日）にて開催を企画します。産業遺産の見方調べ方の観点を加え、従来のシンポジウムにない切り口で身近な産業遺産に着目し、関係博物館の学芸員に加わって貰い持続可能な博物館にも繋げると考えている。

Zoom会形式の実行委員会も行い企画を詰めて行く。

［169-41-02］パネル展と講演会／杉山清一郎

テーマ「ものづくり中部の革新者たち　Ⅲ」

開催予定：2022年8月23日（火）～9月11日（日）

会場：名古屋都市センターまちづくり広場

講演会・定例研究会：9月4日（日）を予定

勉強会の予定：

別紙パネル作成人物リストを参考に分担し、適宜開催を案内します。多くの会員にパネル原稿を作成していただけるよう勉強会を通して準備を進める。2022年3月に原稿完成を目指す。

また、従来同様に協賛金申請を予定。

質問等
寺西：渋沢元治に関連し逓信技師として活躍した岩瀬鉄次郎も加えていただきたい。

［169-41-03］ものづくり再発見ウオーキング／山田富久
2022年3月5日に一宮にて実施予定、検討中。

［169-41-04］出版編集委員会／石田正治
別紙(役員会資料)のとおり予定。
パネル展と連携しつつ、パネル展原稿に補訂する形で、原稿の見直し、人物ゆかりの地や産業遺産案内などを追加する。

［169-41-05］ＷＥＢサイトの運営と管理／岩井彰真
岩井氏欠席。従来通り進行。

5. 見学会、その他の催し物

［169-51-01］「旧山繁商店（国登録有形文化財）見学会」（第171回）／事務局
集合日時：2022年3月20日（日）午後1時20分
集合場所：旧山繁商店（瀬戸市仲切町・深川町）前
見学の案内解説：瀬戸市文化課に依頼中。（予告なく変更することもあります）

6. 文献紹介、資料紹介

［169-61-03］「KINIAS ニューズレター」近畿産業考古学会
［169-61-04］「ニューズレター」東京産業考古学会
［169-61-05］「九州産業考古学会報」九州産業考古学会

7. 出版広報事業

［169-71-01］インターネット
http://csih.sakura.ne.jp/　左記です。一度ご覧下さい。
［169-71-02］中部産業遺産研究会の書籍出版事業／石田正治

8. 委員会、役員会、研究分科会

［169-81-01］幹事会・役員会等／事務局
・11月14日に2021年度第1回役員会を実施(労働会館)
内容：今後のスケジュール確認、会計・書籍、シンポジウム、パネル展、出版編集検討委員会中部産業遺産研究会著作権規程について、ＷＥＢサイト運営、その他
・必要の都度メールで実施

9．事務局関係

［169-91-01］会員異動（前回の定例研究会以降／事務局
入会（敬称略）：中川洋、夏目欣昇
［169-91-02］2021年度会費納入のお願い／会計
2021年度分の中部産業遺産研究会の年会費について、まだ振り込み頂いていない方は、納入頂けますようお願いいたします。
１．金額　　４，０００円
２．振込口座
三菱ＵＦＪ銀行　鳴海支店
普通預金　１５３１２６６
中部産業遺産研究会　会計係　加藤真司
３．問合窓口
会計担当　加藤真司　ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp
［169-91-04］書籍・資料等交換会／事務局
会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引き継ぎます。
［169-91-05］その他
［169-91-06］研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局
■2022/01/16(日)　10:00～12:00
シンポジウム「日本の技術史をみる眼」実行委員会
名古屋市民活動推進センター　集会室
■2022/01/16(日)　13：15～17：00
第170回定例研究会
名古屋市民活動推進センター集会室（ナディアパークデザインセンタービル６階）
■2022/03/20(日)　13：20～16：00
第171回定例研究会見学会
場所（瀬戸市　旧山繁商店）
■2022/05/22(日) 13：15～17：00
第３０回総会　第172回定例研究会
会場;未定 *とよた市民活動センターへ申込中。
■2022/07/(下旬)
第173回定例研究会

第170回定例研究会 案　内

期日:2022年1月16日（日）13：15～17：00
会場:名古屋市民活動推進センター　集会室
アクセス：案内図を参照。
※研究発表、話題提供など受付中。申し込みは、事務局長山田貢〈yamada202102@gmail.com〉まで。
※同日、午前中に「シンポジウム「日本の技術史を

みる眼」実行委員会」を開催予定。

■名古屋市民活動推進センターへのアクセス

〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号

ナディアパーク　デザインセンタービル6階

・地下鉄「栄」駅　7,8番出口より徒歩7分

・地下鉄「矢場町」駅　5,6番出口より徒歩5分

第171回定例研究会・見学会 案　内

期日：2022/03/20(日)　13：30～16：00

見学場所：瀬戸市　旧山繁商店

集合：旧山繁商店（愛知県瀬戸市仲切町・深川町）
13時30分までに直接お越しください。

アクセス：名鉄瀬戸線 尾張瀬戸駅から徒歩（瀬戸蔵ミュージアムから北へ徒歩10分ほど）

※当日、12:30～13:10、尾張瀬戸駅にて大橋公雄会員が研究会の旗をもって案内します。

大橋会員の携帯電話：090-1095-8302

２０２１年度年会費ご入金のお願い

1. 年 会 費　　4,000円
2. 振込口座

銀行支店　三菱UFJ銀行　鳴海支店

種　　別　普通預金

口座番号　1531266

口 座 名　中部産業遺産研究会　会計係

加藤真司(かとう　しんじ)

※ 2021 年度会費を未納の方は上記口座にお振り込み下さい。

■『産業遺産研究　第29号』投稿原稿募集について

・査読付きの論文・研究ノート・調査報告の投稿原稿の締め切り日は、2022/04/15です。

・産業遺産紹介、博物館紹介、海外情報、文献紹介などその他の原稿の締め切り日は、2022/04/30です。

・問い合わせ・投稿先

編集委員会　石田正治　ishida96@tcp-ip.or.jp

■編集後記、原稿募集

■編集後記

またもや新型コロナウイルスの猛威が襲って来そうな状況ですが、第170回定例研究会は予定通り開催されます。

今号の連載記事は、天野武弘会員の人造石の産業遺産めぐりシリーズは第10回目、石田の海外産業遺産めぐりの旅シリーズは、次回に掲載予定です。ご期待下さい。(石田)

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見などお気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメモを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治　ishida96@tcp-ip.or.jp

第86号の原稿締切日：2022/03/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第86号（2022/04/15）　第87号（2022/07/15）

第87号（2022/10/15）　第88号（2023/01/15）

中部産遺研会報　第85号　ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.85

発 行 日：２０２２年１月１５日

発 行 人：黒田光太郎

編集委員：石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子

中部産業遺産研究会事務局：

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194　山田 貢　方

中部産業遺産研究会のホームページ　http://csih.sakura.ne.jp/index.html

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2022, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.